
オカルト研対決日記

intruseSR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オカルト研対決日記

【Nコード】

N6799I

【作者名】

intruseSR

【あらすじ】

最近起こる連続怪事件、突然の転校生、非合法団体「イノセンス」。
。そしてそれらに何の因果か会ってしまったオカルト研究部。そう、それが仕組まれた歯車とは知らずに。崩れ去った平和な日常を取り返すために奮闘した彼らの戦いを描いたミステリー。

続編開始！

<http://ncode.syosetu.com/n0055k/>

提供but消去

梅雨も終わり、暑い日が続いているこの頃。漫画によくあるUFOや怪獣、化け物なんてものは存在しない平和な時代。そりゃ、どんな時代にもそんなものは存在しないんだけど、居た方が面白いだの、居ない方が平和だの、そんなレベルの低い争いは必ずといっていいほど起こってしまうのが、ニッポンってものだ。でも、いないものはいないんだし、そんな非現実的なものはこれまでも、そしてこれから現れることはないだろう。

そんなことを考えていたのは、最近起きていた5つの不可解な事件はすべて関係しているう、などと抜かす間抜け、金子健太に絡まれていたからだ。

「それでさあ、ゴクエンくうくん。最近いっぱいおかしな事件、おきてるよねえ〜?」

「金なら貸さない」

とりあえず、即答。

「誰もそんな話はしとらん!でさあ、マジだったんだよねえ。」

「ああ。なんて言っただけ。『沢森市を中心にした、ある円周上の都市で事件が起きている』って木田が言ってたやつ?」

「そう、それだよそれ。なんか怖くね?」

「別に。ただの偶然だろ?」

「んなわけないだろ!五回もだぞ!やつばおかしいだろ!」

金子は非常に興奮していた。ま、確かに怪しいように見えるが、宝くじで《四等》という微妙な位置に三回連続で当たった親戚のおじさんもいれば、一セット五枚のカードパックを一個買った所、全部同じカードだった経験を年一回は必ずしている少年がここにいる。それと同じように、五箇所の現場の関連性なんて意外と簡単にこじつけられそうだ。

しかし、と考えてしまう。たたりだとか神様は論外としても、これ

がなにかのサインだったら。

「おびき寄せる……。」

「ん？なんて言ったの？」

「いや、別に。」

さすがにそんなわけない。頭の中にあっただひとつのあらすじをかき消して日村竜馬は駆け出していった。

登場 and recall 記憶 そして友好

というわけで学校についたわけだが、妙に落ち着かない。今まで俺の隣の席である、窓際最後尾に席がなかったのをいいことにそこを雑談場としてひろびろ使っていたわけだが、朝見るとそこにはいない。机があつたのだ。当然雑談はナシ、そして目の前には落ち着きのない少年金子が立っているわけだ。

「で。これはなんだ。」

「見てのとおり、机だね。」

もうふざけたボケはスルーする。普通に考えれば可能性は三つ。ひとつは他クラスを追放された罪人の流刑地。この学校は意外と多い。二つ目は転校生の席。ま、もうすぐ夏休みだしこの時期にはありえないだろう。三つ目は、研修生だとか少人数制度とかいうやつ。よくわからないけど、まあそういうことで。それで、だ。

「昨日の『笑いの神様』おもしろかったよね！。個人的にはオードリーが…」

この、延々と話し続けるペチャクチャロボットはどうにかならないだろうか。しかし金子はおるか教室中が静寂に包まれたのは一人の少年のおかげだった。

「今日からこの学校に通うことになった、神山大輔です。」

正解はBだね、と金子の声がしたが、それは耳にもいれずに、ある人生のページを思い出していた。

それは4歳になって少したった冬休みのことだった。日光へ観光にいった夜、ホテルで父母とはぐれたときのことだった。バアアアアアンという轟音とともにホテルは崩れ始め、変なにおいがしてきた

のだ。後になつてわかつたことだが、原因は仕掛けられた爆弾、そして犯人はいまだ捕まっていないという。

そして当時子供だった俺は状況が把握できず逃げ遅れた。そして、しばらく絶望してきた僕の元に現れたのが、神山と名乗る消防士だったのだ。しかし人見知りの激しい俺は、落ちてきたコンクリで子供一人ぐらいしか隙間のない空間からようとはしなかった。そうこうしてるうちに発生した火災の火が近づいてきた。しかし一向にようとはしない。

それをきっかけとして、頑固な性格を極まった炎のような志だと言われ、あだ名まで作ってもらつて、その当時好きだったアニメのキヤラみたいな「ゴクエン」というあだ名の響きが気にいって、いつのまにか隙間から出ようとしていた。

そのときだった。隙間の真上からコンクリの塊が落ちてきたのだ。確か神山消防士は僕の腕をおもいきり引つ張つて、僕のことを投げた。そしてそこから先は本当にまったく記憶がない。

ま、転生だとかは存在しないし、神山なんてありふれた苗字の人はたくさんいるだろう。でも心から否定できないのはもう一度会いたいという想いがあるからだろうか。

そんなことを考えながら無意識のうちに隣に座つた神山に自己紹介をした後、オカルト研究部部长として勧誘をした結果興味があつたらしく、「今度の金曜日に議論があるから来てみなよ」と誘つておいた。

とりあえず友好関係は成立した。転校生の扱い方は、以前同じ状況の時に失敗して常に冷戦状態になつてしまったことがあるので、しっかり勉強したのだ。

こうして、忘れられない戦いは、戦いとは知らずに始まっていたわ

け
だ
っ
た。

オカルト研究部。非常に同好会風の雰囲気があるある意味裏の部活。まあ無理もない。今中二の俺達が一年の時に任された部だからだ。任されなきゃ普通はやらないような部活なので、一年も三年も入ろうとはしない。

しかし、これを喜ぶ人間が五名ほどこの学年にいるのは間違いない。一人、金子健太。超が 個ついても収まらないくらいのオカルト好き。でも本人は を八と読むもんだから、普通の人の八倍好きだとしか理解できない。

二人、土門晋三。どこからどう見ても不良。こころへんでもっとも強いらしい。他人の言うことに従うのは大嫌いらしいが、どうも俺の言うことだけは素直に聞く。あくまでも噂だが、オカルト研に入った理由が「人間と喧嘩しても面白くないから化け物と闘いたい」かららしい。恐ろしいやつだ。

三人、木田友江。かなりの読書家で、好きなジャンルがそういう系らしい。無口なので、何考えているのか分からない。

四人、水嶋諒子。コイツは非常によくしゃべる人間だが、オカルト研に入った動機だけは言わない。きっと人には言えない事情があるんだと思う。

そして五人目がオカルト研部長であり頭も良くスポーツもできる秀才、日村竜馬がこの俺だ。成績は常にトップ10、小学校の頃やつてたリトルリーグでは全国大会出場！なもんだから、どの部活にも興味のない俺に非常に勧誘が多いのでここはオカルト研に入ろうとしたのである、という口実。本当の所、メチャクチャ迷信を嫌う俺がオカルト研に入った理由は否定するためである。ようするに、オカルト研は議論や調査する場所であることを利用して「ほら、これは嘘だっただろ」と言いまくるためだ。

というわけで結成されたオカルト研チーム。今は夏合宿について話

しているのである。

「それで、長野県沢森市に行きたいということは分かったが、動機は？」

まあ分かつているが聞いてみる。

「もちろん連続怪事件の実体に迫るためじゃん！」

「ん？この間まで怪じゃなくて怪死じゃなかったか？」

「そつだ。昨日の事件のせいなんだよ。録画したからここで見ようぜ。」

そつか。たしか昨日の事件は繁華街での無差別殺人だったな。

「では、スターーーーーー！」

ビデオは明らかにテレビのものではなかった。まず車がひとつのビルに突っ込み、犯人は車から降りて刃物を取り出し、恐怖でろくに動くこともできない民衆を次々と殺していった。その殺し方があまりにも不思議だった。

「一人目が右足、次に左手、右手、左足。最後の人は首に切れ込みを入れただけか。」

そう、殺した死体ひとつに一部分四肢を切り取っていった。

そして最後だ。

「カゲガミさまは、もうそこまできている！」

だれに言っているのか知らないが、そう叫んで自分の頭を滅多刺しにしていった。

あまりにもこんな恐ろしいビデオをみても悲鳴すらあげない俺達はやっぱりおかしいのだろうか。

「金子、これ動画共有サイトでダウンロードしたやつだろ？」

「当たり前だろ、こんなグロいビデオ。ま、某アメリカの動画サイトではないぞ。」

「そんなことは関係ない！」

「それにしても猟奇的小説にありそうな事件だな。」

土門が口を開く。こいつは言うことだけはまともなんだが、あの顔で猟奇的とか言われると非常に怖い。

「それで、カゲガミってなんだ？ 猟奇的小説風に変換すると『陰神』
だが。『大陰神』って言葉はあるぞ。」

「それについては調べてきた。これを見て。」

そう言っつて木田が差し出したのはあるサイトの印刷だった。

あるサイトの印刷

・陰神とは？

長野県沢森市全域で信仰される二つの神様のうちの片方、通称「負の神様」である。

これは正の神様、陽神ヨウガミと対比され、お互いに持つ同等な力を抑えあうことによつて世界がつりあうという考えのもとに生まれた神である。ルーツは不明だが、ゾロアスター教にも二つの神がいることから、その末端と日本文化の融合と考える説がある。

しかし1965年に起きた火事（原因は不明）により、それぞれを祭っていた神社二つが全焼。再建したものの、それによつて十年に一度世界のバランスが崩れるようになったため、一の位が6の年の八月十一日に『大地の儀式』が行われる。

・大地の儀式とは？

沢森市内の貞康神社で行われる前記の儀式。本殿の中の俗称『神々の像』を中心とした五芒星の各頂点にまず一つずつ、計五個の宝玉を置く。この宝玉には、火、水、木、土、金、の力がこめられている。そして完成したセットに巫女さんが清め、それを納める。これが大地の儀式である。

「え？え？ええー！今年2006年だよ、だよ？
じゃあいまバランスが崩れているのかな、かな？」

金子がどっかで聞いたことのある口調でしゃべる。こういう時にそ
ういうリアクションとられると非常にうざい。

「なるほど…。そういうことか。」

「どういうこと？K-1君？」

「お前は喉でも掻ききってしんじまえ！」

「この会話の流れでそれはかなり怖い…。」

しかし、大体分かった。おそらく信仰がらみだ。だから最終的には
…。

「だから最終的には風土病と組織のはなしだったんだって！なあ日
村。」

彼らはいつまで雖 沢の住民であるつもりなのか。一度熱中したら
止まらない彼らは時に頑固ともいうべきときがある。

「もういい！ただ神様の呪いにかぶせた愉快犯のグループがいるか
も、っただけだ！」

「嘘だ！健太知ってるよ？日村君、黒い車の中で…。」

『（金子以外全員で）もうその話終わったから！』

「ひどいよ…僕だけ仲間はずれにして…。」

そうして、いつの間にか雑談タイムになり、下校チャイムが鳴る。

金子、土門、俺での帰り道。かなり話しくい。非常に好みが合い
そうにない俺達。たとえるなら光の三原色それぞれが俺達の趣味で
白が見えないくらい離れているのが現状だ。しかし今日はいい話題

があつたのでとりあえず提供してみる。

「なかなかうまく出来た話だったな。」

「何が？」

「何がって…。陰神の話だよ。今年はバランスが乱れている。だからそのバランスの原点を中心とした同一円周上で事件が起きたって言いたいんだろ？」

「そっか！でもそれだったらどうして沢森市では何も起きないんだ？」

はじめに発した言葉は聞かなかったことにする。

「その陽神つてのが守っているんだろ。」

「へえー。」

「俺は違うと思うぜ。」

まさか土門まで話に加わるとは思っていなかった。コイツは本当に言うことだけはまともなので何をいうのか気になった

「たとえばけどな、何かの信仰って大体派閥が分かれたりするだろ。それで沢森市にはふたつの派閥があつて、仮に『陰派』と『陽派』とするが。それで何かの抗争になって、ゲームで決めることになったんだ。それがこの事件。」

「もはやオカルトの域超えてるよ！」

「でもそっという意図的に起きているかもな。」

「そっちのほう怖いわ！」

しかし彼の意見にも一理ある。とりあえず、家に帰ったら考えてみよう。

「じゃあいいで。」

「また明日。バイバーイ！」

「see you！」

そして帰路をたどっていくのだった。

金曜日の放課後。それは唯一の公式なるオカルト研の活動時間帯、通称「会議」。とはいっても最もやる気のない活動なのだが。

基本オカルトは超常現象という別名があるように普通の状態ではおきない。つまり普通の活動では何も得られないわけだ。すると、三分の二は雑談と化すことになる。

しかし今日は神山という観戦者がいるわけで、真面目にやるうといつてみた。ま、こいつらには焼け石につばぐらいのもので…。

「今日の議題はオーソドックスに『幽霊』ということでもいいっか！」そして戦いの火蓋が切って落とされた。

「お、俺は見たぜ！あれは冷たい風の吹く…」

「てめえの話は嘘っぱちだからいらん！」

「じゃあ、『全てはそう、アブラゼミのなく頃に…』」

「それはいろいろな意味で間違っている。」

カーブに差し掛かったようです。さあブレーキを踏むことができるのか！？

「じゃあなにを話せばいいんだよ！」

「大事なのは証拠と確率だ！例えば渋谷で五十人の人に『幽…』」

「人間の心には数に表せない何かがある。」

「なにかってなんだ、なにかって！」

「それに、数だけというのは零と一しかないコンピューターの世界です。」

発動！木田の豆知識！そしてそれは潤滑油となるだろう！

「そうなの？」

「ま、二進法だしな。常識だな。」

バコーーン！脱線！横転！死者多数！誰か助けてくれー！

すると不意に笑い声がした。いったい誰が？

声の主は神山だった。

「この部は面白いね！僕、入部するよ！」

という訳で、いささか趣旨が違ったもののそこは目を瞑り、彼は入部することになりました。

教室から見える太陽は、まるで僕らを包み込むように光っていた…、最後くらい真面目に、ね。

deepen謎 まもなく見える 戦いのstart line

深夜一時。眠いのを我慢して今はパソコンをカチャカチャ。なんでこんなことをしているのか。それはあることを思い出したからだ。

『それで、長野県沢森市に行きたいということは分かったが、動機は？』

夏合宿である。くそ、あの時話を脱線させたやつは何処のドイツだ！…俺か。

しかし全員の日程表はもらってあるので沢森について調べてプラン立ててあとは先生に提出すればいいのだ。

「ええと、googleと…それはウイルスサイトか。google
leと。」

ちよつとふざけて調べ始めた。

『・長野県沢森市、人口十数万人

・近隣のスキー場客の宿多し

・神の信仰が多いゆえに神社が多い

・非合法団体イノセンスの発祥地』

「ちよつと待て。非合法団体ってなんだ？」

あまりにも現実離れした情報に、一瞬目を疑った。そして次にイノセンスについて調べてみる。

「直訳は『罪のないこと』。非合法団体だと暴力団、あるいは新興宗教か？」

じつは俺はいわゆるハッカーである。そのため、はじめに探偵事務所
の捜査ファイルにめをつけた。

「これだ…。」

「イノセンス」調査書

独立××探偵団体

我々は独自に様々な犯罪の調査をしてきた。そしてそのほとんどを解決してきた。

しかし、非合法団体イノセンスについては、多額の資金を消費し全力を尽くしたものの未解決に終わった。そこで、このファイルを作成し我々の調査の結果をまとめた。

1 概要

「罪は許されないもの。しかしいったい誰に許されないのだろうか？警察や法律は所詮縛るものでしかない。我とともに自由を掴もう」創立者、故・中島健三郎氏は殺人依頼を受ける団体として…

《中略》

3 重要人物リスト

故・中島健三郎、森下優希、……、神山大輔

4 歴史

《以後後略》

「神山…大輔…？」

人物リストの最後にあの涼しい顔をしたアイツの名前がかいてあった。

度重なる怪事件、その中心の沢森、そこで生まれた非合法団体。そ

してそれを熱心に調べようとする俺らオカルト研の中に入ってきた一人の偵察者。これはもはやオカルトでは片付けられない問題だ。でも。心のどこかでそれを信じたくなかった。せつかく仲良くなれてきたのに、それはあまりにも残酷なものだった。それに、これが本当である証拠は何処にもない。

そう自分に暗示をかけ、寝れば忘れろと思えば布団に入った。

机の上には、地図帳が一つあった。沢森市を中心とする円周とその円周上にある僕らの街、埼玉県風見市が描かれている地図帳が。

次の日の放課後、俺は職員室にいた。合宿のプランをオカルト研の顧問である天川先生に提出するためだ。

「先生それとひとつ聞いてもいいですか？」

「だめよ。守秘義務といってね。」

まだ僕は神山という言葉はおろか、なにも質問はしていなかった。なぜ分かったのだろうか。

「そうですね…。では失礼しました。」

「ちよつと待って。」

「え？」

「そこまで来たらもうすぐよ。」

「？」

神山については分からずじまいだったが、それ以上に天川先生の意味深な発言も気になった。でも、それらをひっくるめて合宿で暴いてやろう。

《以降、あるケータイ同士の話の記録》

「ねえ神山君、日村君が君のこと調べていたわよ。」

「もうそんなところまで…。ではアレを発動するんで？」

「そうね。通称『死の孤島』作戦決行ね。」

「ところで天川さん、全滅はいつごろ…」

deepen謎 まもなく見える 戦いのstart line (後書き)

こんにちは。大分話が進んできましたが、ようやくここで一区切りです。名づけて「学園編 動き出す歯車」。というわけで今回は話題提供。いろいろ疑問が湧くところを用意しました。もしかしたらもう結末が読めた人もいるのでは？でも、最後の最後でどんでん返しも用意してしますのでご安心を。ついでに、話の区切りは、今回もあわせて全部で四つ。タイトル言っておこうかな。まず二つ目。「合宿編 絶望への引き金」。三つ目。「危機編 襲いかかる牙と攻防」。そして最終章が「死の孤島編 それぞれの決意」。乞うご期待！

合宿 in the anxiety

燦々と地上を照らす太陽。その下でうるさいほどになく蝉たち。風のざわめきが流れる鬱蒼とした森。そして、雲ひとつない空をうつす湖のほとりに俺達はいる。

「それで、まずはどこへいくの？」

なんとか大地の儀式と合宿の期間をあわせたもののルートとかちゃんと勉強してなかった俺は、ただ呆然と立ち尽くしていたところを水嶋に突っ込まれた。

「まあまあ。落ち着いてさあ。」

「黙れ！これでもあたし、今回やっと第一声発することができたのに！なにが『それで、まずどこへいくの？』だよ！あたしの第一声かえせ！というより、設定では『よくしゃべる奴』なのにどうしてここまで隠されてきたのよ！」

うーん、その愚痴は筆者に言ってください。俺は悪くない。ただ話を振らなかつただけだ。

気を取り直して、冒頭の雰囲気をもう一度。

八月十日。俺達は待ちに待った「オカルト研究部夏の合宿」に来ている。そこで僕らは連続怪事件についてを研究することとなった。そう、明日の大地の儀式を中心として。

「というわけで大地の儀式が行われる貞康神社からいくか。皆の者！ついて来い！」

十分後…

「ええと、ここは西方向に突っ切れば…いや、こっ回っていけば…いや…うーん。」

「なあ、本当にあってるのか？」

「まあ、細かいことはね、うん。」

「なにが『うん』だよ！」

「ねえ、これつてもしかして迷…」

「言うな！言わないでくれ！それ以上は絶対に！」

つまり迷ったのだ。完全に迷った。自信をもって言えるぜ。

「うーん、ここは…左じゃね？」

「ねえ、あつちじゃないの？」

神山が言った。

「あそこに神社が見えるよ。」

その時、サルだろうか、なにが動物が動いて茂みの向こうに神社が見えた。

「本当だ！」

「部長の面目丸つぶれね。」

結局、その神社まぎれもなく貞康神社だった。

「随分奥地にあるけど、なかなか立派な神社じゃん。」

「神聖な感じだな。」

俺らが神社に関心しているとなにやら和尚さんらしき人がはなしかけて来た。

「君たち、もしかして明日の儀式を見に来たのかい？」

「ええ、まあ。」

すると隣にいた、いかにもエンジニアトらしき人が口を開いた。

「やめておきな。子供が関わるもんじゃない。」

忠告、だろうか。とするとこいつらがイノセンスなのか。

「まあいい。後悔先に立たず、って言うもんな。それに、俺に干渉する権利はないし。」

そついい残すと彼は笑いながら去っていった。

「まあいいか。次行こうぜ。」

俺らはなんともいえないもやもやした感じをおさえながら貞康神社をあとにした。

「よし！では明日の事について、復習するよ！」

夜。全ての仕度を終わらせたあと、会議という名目で時間をとった。無論明日のことについてだ。

それで、明日の事については説明し終わったのだが…。

「なあ、この『摂社』ってなんだ？」

「よく分かんないけど、そこに神様を祀ってるんだって。」

「ふーん。」

一瞬の沈黙。まさか、いやまさかと思う。

「大地の儀式の時ってさ、みんな本殿のほうにいつてるよな。」

「ああ。」

「ってことはこの摂社ってところに人はほとんどいないよな？」

「それで、忍び込むとは言わないとして…。」

「忍び込もうぜ？」

「ふざけるな。不法侵入で捕まるぞ。」

「神社って公共の施設でしょ？」

「いやあ、呪われたり祟られたりするぞ？」

「あれえ、ゴクエンってそういうキャラだっけ？いつもだったら『ふん、祟りなんてあるわけねえだろ』とかいって先頭を歩いてくの。」

「ああ、わかったよ！いけばいいんだろ、いけば…。」

「よし、じゃあ解散！」

そしてみんなは自分の部屋へと戻っていった。

本当は怖い。いや、祟りとかじゃなくて、扉を開けようとしたら「動くな」とかいわれそうぞうで。

ま、夕方になるまで普通なふりをしてよう。

《以降、とあるケータイの通話中に聞こえた声の記録》

「もしもし、パスワード五百九十。神山です。…はい、彼らは大地の儀式についてかなり調べています…もしかすると組織や俺のことも全て分かっているかもしれない…標的はかなりきれいですから…ところで彼のあだ名の『ゴクエン』についてなんですが…あの裏切り者が付けた名前？チツ…そういえばあの消防士殺すのに、標的を利用してたんですよね。…アイツ、まだ生きてる？…そうですか…監禁つても気が引けますもんね。そうそう、今日神社で陰派の男を見ましたよ…はい、ではまた。」

午前三時。ふと足音で目が覚める。誰かが俺の部屋に近づいてくるようだ。

金子か？いや、あいつはこんなに静かに歩けない。それは土門にも言えることだし…。じゃあ誰だろう…。

ガタン、と扉が開く。

「やあ日村君、おはよう。」

「神山か…というより『おはよう』はないだろう？まだ三時だぜ。」しかし彼は突っ込みどころか反応すらしない。そして、とても深刻な表情をしている。

「ところで、なんで俺の部屋に？」

「イノセンス、って言えばわかるかな？」

「やっぱりお前…」

「ちょっと待って。誤解しないでよね。僕はイノセンスとは関係ないよ。でも、どうして『やっぱり』なの？」

「どうしてもこうしてもないだろ！本当は知ってるんだよ。テメエがイノセンス創業者、中島健三郎氏の血を引き、次期総長の最有力候補だつてことをなあ！」

そして神山に調査ファイルのコピーを投げつける。

「そんなところまで調べていたんだね。やっぱり旧反対派代表の直系だけあるね。」

「は？反対派？直系？」

「敵情は知っていても身の程は知らなかったようだね。しかたない、教えてあげるよ。何事にも、反発する組織ができるように我がイノセンスにも反対派ができた。それが日村一派だ。かの有名なT大教授を中心に、もともとは警察では立ち入れないことを中心に解決することが目的で創立されたんだけどね。ちなみに、その教授が君の祖父だよ。」

「じいちゃんが…？」

「しかしだめだったよ。君の祖父が定年をむかえる頃には完全に反対派は飲み込まれた。でも、結果的にそれがイノセンスを二派に分けた直接の原因だったんだけどね。」

「陰派と陽派のことか？」

「よく知ってるね。そして、陰派には切り札と呼ばれる人間がいる。そいつを殺せば全て丸く収まるわけだ。それが、お前。」

神山は背に隠していた刃物をあらわにする。そしてそれを俺に向けと言った。

「陰派は、神の子と信じられているお前がいなきゃ潰れるのは時間の問題だ。」

そういうと、神山はずんずんと俺に近づいてくる。

「ちよつと待てよ。俺は…。」

「悪いけど、ここでgame over。死んでもらうよ。」

神山が刃物を振りかざし、それを下ろす。俺はとつさに逃げるも、刃物が右腕に当たってしまった。切れないものの、血が噴きだした。しかし神山は容赦しない。そして、ついに角に追い詰められてしまった。

「短い間だったけど、楽しかったよ。じゃあさよなら。」

刃物が振り上げられた。そして、少しずつ下におりてゆく。もうだめなのか。ここで死ぬのか。そんなの嫌だ。

やめろ、やめろ、やめろ、やめろ。

「やめろー！ー！」

ピ。ピ。ピ。…。目覚まし時計がなる。外から日がさしていた。

「はあ。夢オチ、か。それにしてもいい気分はしないな。」

よくは思い出せないが、なんだかとてもいやな夢を見た気がする。まあ、あんまり思い出せないのが不幸中の幸いなんだが。

「今何時だ？げ、目覚まし一時間前にセットしてんじゃねーか？じや、もう一寝入りつと…？」

気がつくとも部屋がとて乱雑している。というより、昨日まで畳に

こんな赤いしみなかったような…。

ふと、自分の手を見る。なんでだろう、肘から上に包帯が巻いてある。不審に思った俺は全身をチェックする。すると首筋に注射跡を見つけた。そして頭に一本の針とそれに細いコードで繋がったケータイのような機械。

「なんなんだよ、これは…。昨日なにがあったんだよ…。」

俺はとて不審に思ったが、昨日なにがあったのかは全く思い出せない。しばらく俺は恐怖に怯えながら、ただ呆然としていた。

全ての扉が開く時

「とりあえず、もう貞康神社にでも行こうぜ。」

朝からずつと早朝のことを思い出そうとしていた俺は、とにかく今は忘れようと努力していた。幸い長野は寒いので長袖。つまり、包帯がばれる事は皆無に等しい。あまりみんなに知られたくないことだったから、とても嬉しい。

そんなこんなで貞康神社に向かつてる俺達だったが、なにかを忘れていたような気がする。

「ところでさ、なんでこんな早くに神社に来てるの？」

水嶋が聞く。なにかいやな予感…。

「昨日話しただろ？ゴクエンちゃんが摂社に入るって。」

「ちよつと待て。なんで俺だけなんだ？」

「だって普通入りたくないぞ？」

「おれも普通の中にいれる！」

「なら、俺が行こう。」

「土門…。」

「俺は普通じゃないしな。…腕が鳴るぜ。」

どうやら例の噂は本当だったらしい。まさか「化け物と戦つ」ために入部したなんて。

「分かつたらさっさと行くぞ！」

「は？俺達も？」

「当たり前だ。」

「応場所は知ってるので着くには着けた。」

「金子って確か開錠の天才だったよな？」

「え？いやあ、まさか…。」

「開錠頼む。」

「うそーん！」

確かに金子は開錠は上手い。自転車から屋上の扉まで、許容範囲が

広い。

「あ、あんたたちが勝手にやって呪われるのは構わないけど、あなたは嫌よ!」

「んじゃあ俺と金子だけではいるから。日村、水嶋、木田、神山はそこにいろよ。」

「なんでゴクエンは傍観者なのー!」

金子が無意味に叫ぶが効果なし。そして作業を始めた。

「うう…呪いなんて、呪いなんて…」

水嶋が怯えている。これはもうすぐ爆発するな…。

「ま、呪いなんて…」

「あるとしか言いようがないんじゃない?」

「神山…。」

その時、俺は昨晚のことを思い出しかけた。確か俺と神山が言い争ったような…。

しかし神山はそれをさえぎる様に続けた。

「ねえ知ってる?元々は陽神、陰神に一つずつ神社があったんだ。

でも、再建できた…いや、再建したのはこの貞康神社だけ。」

「どついうことだ?」

「これは陽神の神社。そして陰神はどこに奉られていると思う?」

「もしかして…。おい土門、やめろ!」

そう、撰社の定義はその神社と縁が深い神が奉られている所。陽神にもっとも関わりがあるのは陰神。つまりあそこに奉られているのだ。

しかし、開錠に集中してるあいつらには聞こえてない。

「たぶん日村君は勘違いしてる。陰神は奉られているわけじゃない。封印されているんだよ。」

無論、封印だとか神様だとかは信じない。でも、これは前にも経験したことあるような不安だ。だから、あいつらをとめなきゃ…。

「よし、開いたぞ!せーの、オープン!」

遅かった。間に合わなかった。

アニメとかだと、神様の降臨って光が溢れた所から登場するイメージだけど、実際そんなものはない。ただ、おれたちが感じたのは胸に刺さるような圧迫感、ジンジンする耳、そして息苦しさから来るめまい。そして誰からともなく俺達は倒れていった。

全ての扉が開く時（後書き）

こんにちは。ここで二区切り目です。なんかこの編やけに短かったな。さて、ここらへんになると、最終回への伏線がありえないほど多くなってきました。陰神の神社がどうして建てられなかったのか。神山の秘密とは何か。陰派と陽派の実体。色々ありますが、そろそろグチャグチャになってきますので、理解不明の方続出かも？というわけで、また危機編の最後に会いましょう。では。

見えない task そして attack

もう八月も終盤。大体の学生は宿題に溺れて大忙しい時に俺は何をやってるんだか。部会だとか言っただけで学校に行こうとしている俺は、傍から見ればもう宿題なんて終わってるマジメ君か、はたまた最終日にやればいいと思ってるマヌケ君に見えることだろう。もちろん俺は前者であるが、その辺は説明するまでも無いだろう。宿題なんて七月中に終わらせるものである。ここでは八月二日の昼に終わらせたことは伏せておこう。

そうこうしてるうちに学校についていたのだが、あれ以来 合宿から帰った後からは全く会ってない。あの時は最初に起きたらしい神山が大人を呼んできたから助かったのだが……説教つきで。さて、みんながいる気配はあるが効果音はおるか会話すら聞こえない教室に入るのはかなりきつい。

ガララララ。扉を開けると、水嶋を除いた五人が椅子に座っていた。

「水嶋はまだなのか」

「・・・」

「今日も暑いな」

「・・・」

「宿題やった？数学の複素数の問だ」

「ちよつと黙って」

「いやあ、嫌われてるの？」

「どうしたんだよ？」

「あの、えーと、その……」

「はつきりしろよ」

「水嶋が行方不明らしいんだ」

「ふえ？」

「思わずあほらしい言葉が出てしまった。」

「ここは『ドッキリスタジオ』ですか？」

「日村、アイツ合宿終わってからキャンプにいったんだ。そこで釣りをしてる時に足を滑らせて流されたらしい。身体が見つかってないから行方不明らしい」

悲しそうに土門が言う。まるで、死体があがってないからかろうじて行方不明という扱いになってる、とでもいうように。

「…今日は四月一日じゃないよな」

「ふざけるな」

「そうか」

とても悲しい事実だ。だが、これは偶然なのだろうか？確かに川に落ちて流された、というのはよくある事故だが、話が上手すぎる。死体が見つかってないってのも変だ。やはり何か陰謀があるのだろうか。俺たちの沈黙に反して、蝉は騒々しいほどに鳴いている。

その後、木田がある山の樹海で失踪したのは三日後のことだった。

発見 それは終焉への入り口

木田がいなくなった。それも水嶋の時と同じように身体が見つからない状態で。木田がいなくなっただけから部会は続いた。しかし、それもそう長くはなかった。

「土門までが土砂崩れにあって行方不明だった？」

ついに土門までもが行方不明になってしまったのだ。もはやだれにだってオカルト研が狙われていることが分かる状態だ。そんな俺らに取られた措置。それは自宅謹慎という非常に甘い対策だった。

でも、俺はこの時行方不明とは別の、もっとおかしいことに気づき始めていた。

例えば俺の親。少しでも成績が下がると先生を質問責めにするくらいにモンスターペアレント精神を出しているのにも関わらず、息子が危ないことが分かっているのに何も対策をしない。考えすぎだとは思えない気もするが、何か引っかけか。

それに先生。今思えば合宿自体変だった。普通生徒の行動には目を光らせるはずなのに、不法侵入まで許している。そして「自宅謹慎」という措置。あまりにも無警戒すぎる。

そして、事故原因。犯人は遊んでいるのか、「水」嶋は川、「木」田は森、「土」門は土で行方不明になってる。そうすると俺は「日」だから炎で、「金」子は買収？ようするに犯人は個人を特定している、身近な人間かもしれない。

と、謹慎中に色々考えていたのだが、やっぱり分からないことがたくさんあって、気づけばPCを立ち上げていた。

本当は遊ぶつもりだった。新作のオンラインゲームで遊ぶつもりだったのだ。

一通のメールが届いていた。そこにはひとつのURLが貼ってあった。送り主を調べようとすると、そのメールはすぐに消えてしまっ

た。

こういうのはよくある。少しプログラムを加えることによって、一定時間でメールを消すことが出来ることは説明するまでもないだろう。

あらかじめコピーしておいたURLにリンクした。するとそこには、あの日どんなに探しても見つけないことが出来なかったサイトがあった。

「イノセンス公式サイト…。」

そこにはちゃんと本拠位置まで書かれていた。場所は俺の家の最寄り駅付近。その駅には二つの高層ビルが駅を挟むように建ってるため、路地裏にある本拠地はもはや地図上に記載されてないも同然の場所だ。

ここは警察に通報するべきか？そう思ったが次の瞬間俺はバッグをもって扉の取っ手に手を掛けていた。やばくなったらすぐに引き返せばいい。そういう安易な考えが頭を占拠していた。

ふと振り返る。俺は自分の部屋を一瞥する。そういえば最近掃除してないな、そう思って部屋を出た。もしも。もしも帰ってこられたら、掃除してやるからさ。さようなら。

絶望の島への旅立ち

家を出た後俺は駅に直行するはずだった。しかし、一時間たってもそこへ着くことはなかった。

決して逃げたわけじゃない。多少遠回りしただけだ。

俺の町には大きな道路が二つある。

一つは江戸時代の五街道の一つ。この道路は俺がもっとも好きな道だ。結構都会のはずなのに道路沿いに木がたくさんある。

もう一つは高速道路の下にある道路。この道の先には大きな川を渡る橋がある。この橋から眺める川の向こうの町の景色が好きだ。

そんな俺の大好きな二つの道をサイクリングしていた。

そして、走り終えた時にはもう日が暮れ始めていた。

「そろそろ行くか。」

そう呟き、今度こそ本当に行くことにした。

何となくモヤモヤした気分で裏路地に入る。心臓の鼓動が早くなっているのを感じた。俺らしくないと思いつつもケータイに110と入力したまま持つ。これで通話ボタンさえ押せば繋がる。少し安心した。

しかし、その安心もつかの間だった。

ふと後ろに気配がするのだ。一体誰だかわからない。振り向けばいいのだが、身体が硬直して動かない。少し、また少しと近づいてくる。

そして急に気配は走り出してきた。その時振り返ることが出来た。

相手は黒い洋服に身を包んだ大きな男。手には…ナイフを持っている。ようするに、殺人？

とっさに俺は走り出した。しかし、相手は早い。すぐに差を縮めら

れてしまい、ナイフの攻撃可能範囲まで入ってしまった。これはマズイ。だが手立ては全くない。下手をしたら殺される。ケータイはいつの間にか落としてしまったようだ。どうすることもできないなんて

「ゴークエーン！」

横にあるゴミ箱から見覚えのある男が出てくる。そしてそいつは黒い男を抑える。

「金子？どうしてここに？」

「知るか！っーか逃げろ！ここは俺に……」

「死亡フラグ建てんな！」

「いいから早く！」

そんなふざけたやり取りに黒い男は黙っていなかった。

「チツ」

「ぐふぁ！」

金子に刃を向けた。

「金子！」

「いいから早く…行け…」

彼は最後にそう言つと目の前で倒れていった。

「貴様も死ねえ！」

黒い男は俺のほうに来る。もうだめだ。

しかし、その時だった。

「やめる！」

これまた聞き覚えのある声。しかしこちらはまだ馴染んでいない声だ。

「大丈夫かい、日村君。」

「神山…」

彼は手を差し伸べる。しかし、俺はその手をはたく。

「元凶はお前だろうが！」

なんだろう、この既視感。

「痛いなあ。僕がいなかったら死んでいたのに。」

愉快だと言わんばかりに俺の顔を覗く。

「みんなはどこだ」

「みんな？僕と君と金子君ならここにいるじゃないか。」

「違う！水嶋、土門、木田のことに決まってるだろ！」

「うーん、とりあえずこの島にはいないね。」

「は？」

「それよりもどうして君はそんなに僕のことを睨んでいるのかな？」

「うるせえ。合宿のあの朝に全部ばらしたのはお前だろうが！」

「朝？そんなこと知らないが。」

「とぼけるな。ちゃんと刃物で切られた傷もあるんだよ！」

「へ？そんなこと言われたって…。まさか裏で繋がってる奴が……。」

「
神山は本当に知らないようだった。では誰と俺は言い争ったのだろう。」

「そんなことはどうでもいい。どうだい、君のことを僕は気に入っているんだ。君の友達の所へ行きたくはないか？」

「それはどういうことだ？」

「ようするにこういうことだ。他の奴らは無理矢理あの島へはこんだけど、君の場合は任意同行でも構わないと言っているんだ。もちろん拒否したらここが君のお墓（笑）になるけど。」

「なんなんだコイツ。つまり俺たちオカルト研はどこか分からないが孤島へ飛ばされているっていうことか。それはほかのみんなが生きているということでもある。」

「いいだろう。」

「じゃあ一応これを…」

口元に布をあてられた。きつとこれは発ガン性のあるクロロホルムだろうな、そう思いながら深い眠りへと誘われていった。

そもその間違いがここにあったことは、この時点で知る由も無かった。

死の孤島作戦始動！

目が覚めると、俺は船の一室にいた。

ふと辺りを見回す。するとテーブルの上にICレコーダーがあった。俺はスイッチをいれ、再生ボタンを押した。

『やあ日村君、私は……仮にKとでもしておこう』

「いや、神山だろ」

『うるさい！え、なんで会話が繋がったのかって？どうせ君は「いや、」の間違いじゃね？」とか言ったんだろ？僕は別に毎週月曜日にコンビニで発売される少年誌と関わりがあるわけじゃないからな！』

なあ、今深刻な事態なんだからギャグいれんなよ……。

『まあいい。これから君には、ある島へ行ってもらおう。そこは……イノセンスの本当の本部だ。同じように他の仲間たちも送っておいたよ。それでゲームをするんだ。』

ゲーム？

『まあ簡単なゲームさ。色々な肉食動物と、コルト・ベスト・ポケットで戦うゲームさ。』

つまりこういうことだろう。これから行く島には猛獣達がわんさかいて、そのなかに護身用の、子供でもなんとか打てるくらいの銃を片手に乗り込むわけだ。

『無論、銃は島に着いたらへりから落とす。それで開始だ。』

ようするに、今渡すとジャックでも起こしかねないから、あえて向こうで渡すってことか。

『実包は結構はずむぞ。だが、なくなるかもしれない。そういう時は地面を調べるといい。ナイフやらカッターやら埋まっていたりするぞ。』

ちよっとまで。獣相手に肉弾戦はきつい。

『そして、獣たちを倒し、島の中央にある塔へ行くんだ。そしてそ

の屋上に、君へのプレゼントが待っている。』

そこには……みんながいるってことなのか？

『過度な期待はしないでくれよ。なんでも願いをかなえる龍じゃないんだから。』

やっぱり毎週月曜日にコンビニで発売される少年誌と関わりがあるんじゃないか？

『まあいい。とりあえず精進してくれ。ちなみにこの船はいつでも停船場にある。好きな時に帰りたいまえ。そのかわり、船はこれ一個しかないから、帰ったら二度と戻れないぞ。』

さつきから思っていたんだけど、この上から目線の人、俺の同級生だぞ。

そんなわけで、いつのまにやら山田 介的な展開になっていたわけだが、ともかくこれからは真剣にいこう。目標は中央の建物。そして仲間の救出と、場合によっては……神山を含めたイノセンスメンバーの射殺。これはしかたのないことだ。

俺は、この戦いを終えて、あの日々を取り返すんだ。

そして島に着いた。船に乗っていたヘリが飛ぶ。

「日村君、ICレコーダーは聞いたよね。ほれ。」
実包と銃を落としてきた。

「では検討を祈る。アディオス！」
バン！その時そんな音がした。ヘリが不自然に揺れ始める。そして中央の塔に激突した。

すごい煙を上げている。中にいた奴らは、生きていたとしてもかすり傷ではすんでいないだろう。

すまない。多少文章が間違っていたので訂正する。

俺はとつさに、落ちてきた銃に弾をいれ、ヘリに向けた。もちろん

試し撃ちを兼ねてへりを狙った訳だ。そしたら見事に命中。へりは墜落した。

「あれだけの事しておいて、無事にすむと思うなよ。『アディオス』ってのはもう二度と会えない時に使うものなんだよ。」

そう、俺は……いや僕は言った。僕はカッとなると人格が変わる。

無論千年ナントカみたいにも、容姿までも変わるわけではない。そして最後にこう宣言した。

「戦争をはじめようか。」

死の孤島作戦始動！（後書き）

はい、危機編終了。なんか主人公の性格が変わっちゃったよ。きつと「超展開ワロタ」とかいわれてるんだろっな。

というわけで、次回からついに最終章です。死の孤島編です。

サバイバルがはじまり、島を散策するゴクエンですが、仲間は一体どこに？また、イノセンスの実態とは？そして、崩れかけた塔の屋上で待っている、悲惨な運命。それを目撃したゴクエンの最期の選択とは！？

とまあこんな感じです。なんかこういうあらすじ的な文だけ読めばかなり感動しそうなんですが、どうしても上手くないのはやっぱり所々にあるギャグが原因でしょうか？

それと、いままで忘れていたんですが「感想機能」。これ夢なんだよね。誰かから評価されるの。だから書きます！

「感想待ってます」。

これからもよろしくお願いします。次は最終回直前のあとがきで皆さんと会うことになってますので、またそのときまで。さよなら。

番外編 陰陽戦隊オカルトレンジャー！（前書き）

「オカルト研対決日記」のhit数が1000を超えたので、浮かれて番外編を作っちゃいました！

舞台は物語の始まりである七月より少し前、まだゴクエン達が一年生の頃のお話。ようするに前日談。

ではどうぞ、ご堪能あれ。

番外編 陰陽戦隊オカルトレンジャー！

これはある冬の話だった。

その年の冬は例年よりも寒く、冬らしいといえば冬らしい、そんな冬だった。

はあ、と吐息をはく。すると白い煙のようだった。

俺の名前は日村竜馬。皇城中学の一年生だ。なんだかよく分からないけど、今俺は「オカルト研究部」という、いかにも同好会のような部の部長をやっている。

そして今日日曜日、俺は町外れの沼にやってきた。

「なあ、その『外来種の魚を喰う伝説のエコフィッシュ』ってのはこの沼にいるのか？」

きらきらした目で沼を眺めている元気な少年の名前は金子健太。小学校の時、よく同じクラスになっていて、今新聞部の「正本雄二」とあわせて「ジョニルトリオ」と呼ばれていた（一応説明しとくが、「金」子、「正」本、「日」村だからジョニルトだ）。

「ねえ、本当にそんな魚いるの？」

そう疑っているのは水嶋諒子。彼女は、実は二学期に引っ越してきたのだが、オカルト研を見つけたるなりすぐに入ってきた。そんなに超常現象とはおもしろいものなのだろうか。

「多分、そう。」

今の、ぼそつと言ったのは木田友江。無口で読書家。どこにでもいそうなキャラだが、読む本が読む本である。無論、BLではない。

「まあいい。どっからでもかかってこい。」
今なんか物騒なセリフをはいたのが土門晋三。モロ不良だが、外見を指摘すると本人は怒る。色々噂があるが、どうもオカルト研に入った理由がわからない。

そんなメンバーで、今日は町外れにある沼に外来種の魚を喰う伝説のエコフィッシュがいると聞きやってきたのだ。

「見つからんな。」

「フーかいるわけねーだろ。」

「いやいる！絶対に！」

そんな会話が延々と繰り返されていく。

しかし、そのループは数分後に解けた。

「おい見るよ！ブラックバスがああ魚に喰われているぞ！」

みんなが注目する。あれは……。もしかして……。

「ふーん。本当にピラニアがこの沼にいたんだ。」

「ピラニアかよ！」

そうなのだ。だれかしらんがこの沼にピラニアを放したという伝説が伝わっていたのだ。

「全然違うじゃん！」

どうやらみんな勘違いをしていたようだ。

「これはエゴではなくエゴじゃないのか……？」

ふん、そんなギャグ面白くないもん。

しかしそんな時だった。

「ねえ、あのピラニア大きくなっているよ！」

そう、急激な速さでピラニアが巨大化しているのだ！

そして立ち上がった。

『フッフッフ。見破ラレテシマッタナ。ソウ、私ハピラニア星人ナノダ！』

いや、だれもそんなことは言っていないんですけど。

『秘密を知ってしまったお前たちはここで死んでもらう！』

いや、最初は片言に発言したくせに、本当は日本語流暢に話せるんだな。

「仕方ない、みんな行くぞ！変身！」

そして僕らはよく分からない音楽と共にスーツへと着替えてゆく。

『あのー、一応待機しときますね。』

「当たり前だ！」

そして数分後。

「よし、いくぞ！」

「金のように輝く戦士、オカルトゴールド！」

「広がる大地のごとく逞しい、オカルトブラウン！」

「自然破壊は許さない、オカルトグリーン。」

「水のようにしなやかなボディのオカルトブルー！」

「そして、真つ赤な太陽のように気高き戦士、オカルトレッド！」

『（全員で）五人合わせて、陰陽戦隊オカルトレンジャー！！』

説明しよう！オカルト戦隊とは、普段は普通の中学生だが、敵が現れると容赦しない正義のヒーローである！

ちなみに、誰が何色かは想像にお任せします。

『く、あらわれたなオカルトレンジャー。だが、ここまでだ！』

そういうと戦闘員を召喚する。

「みんな行くぞ！」

戦闘開始だ！

「必殺、『スイーツ（笑）殺し』！」

そういつてグリーンは「恋空」の本で戦闘員を叩きはじめた。ちなみにスイーツ（笑）とは、ケーキのことをスイーツと言ってしまっ頭をもった女性のことである。その辺はwikiってね。

「いくぜ。『普通のパンチ』。」

そういつたのはブラウン。奴は变身しなくてもいいんじゃないのか？とにかく普通のパンチで殴り倒している。

「ブルービーム！」

そろそろネタ切れかといわんばかりの普通の技。でもちゃんと敵は倒している。

「お、俺の番か。ゴールドテイクオーバー！」

そういつてゴールドはなにか紙の束をせっせと投げていく。すると戦闘員達は逃げていった。詳細については「take over」を調べてみよう。

そして……俺の番。

「くらえ！必殺ファイナルブラスト！……て、え？」

戦闘員、もういませんでした。

「くそう、一番格好いい技出せたのに！」

「遅いのが悪い！」

『クツクツク。おれがいることを忘れてないか？』

「なあ日村、テキトーにやっつけていいよ。」

「サンキュ、土門」

許可が降りたので、抹殺するか。

『ちよつと待て。なんかもう本名だしてるし。ってか勝つこと前提に話し進めてないか？』

「いくぞ！ニュークリアーバースト！」

要するに核爆発。

『巨大化ぐらい、させてくれえ……。』

そしてその後、日本は跡形もなく消えて、平和を乱す者は二度と現れませんでした。彼らオカルトレンジャーの活躍は、黒歴史として後世にまで語り継がれていきましたとき。めでたしめでたし。

「ところで、これはなに？」

「えっと、オカルト研のPRのために作ったドラマCDなんですけど。これを四月の部活動オリエンテーションで配っていただけなら……」

「ダメに決まっているでしょう。」

番外編 陰陽戦隊オカルトレンジャー！（後書き）

なんかすいません。本当は「1000の顔を持つ男」という短編ミステリーを作ってたんですが、どう道を間違えたのか、くだらないギャグ小説になってしまいました。でも、「1000の顔を持つ男」もちゃんといつか書きます。だって 書くんですから。

の中は次のあとがきで発表しますので、お楽しみに。
ではさよなら。

Limits 告げられた真実と沈黙

そういえば、今は夏休み。クラスメイトは何をしているのだろう。こんな暑い中、することなんてそんなにないはずだ。

「あ、海か」

そうだ。海といえば夏の風物詩。きっとみんなで旅行に行っていたりするのだろうか。まあ中学生だし、保護者同伴なんだろうけど。でも、みんなで旅行、なんて告白のチャンスだ。夜中に呼び出してつてヤツ。実は僕にも憧れてる異性がいるわけである。

そうだ二学期の文化祭でも告白しよう。うん、それがいい。

と、余計なことを考えたものの、まず何しよう？目の前には森、振り返れば海。当然あの高い塔に行かなくちゃいけないんだけど、迷ったらどうしようか。

その時後ろから声がした。

「おい坊主。いかねえのか」

船にいたおっさんだった。僕はとっさに銃を向ける。

「おいおい、俺は関係者じゃねえぞ。ただ大金で雇われているだけだから。お前らが何をやってるのかなんて全く聞いてねえ」

聞いてないって、銃持ってたんだから危ないことって事くらいわかるだろ。

「いや、こっちも娘の命がかかってるからねえ。そんな事ツッコめねえんだよ」

意外と重い過去！？

「それはそうと」

そしてその過去をも見てみぬふり！？

「お前、どうしたらいいかわかんねえんだろ」

「いや、まあ」

「んならこれ使えよ」

「方位磁針？」

随分と高そうな、でも使い古した方位磁針がそこにはあった。

「これは娘が最後にプレゼントしてくれた、大切な物だ」

「え？こんなの使えませんか！」

「うっせーな、さつき話聞いていたぞ。仲間がどうのこうの、ってな」

「そうですか……。で、でも！」

「いいんだよ。昔俺の友達にもそんな奴がいた。名前は、確か和馬とか言ったか。アイツも今のお前と同じような状況の時があった。一人で大きな組織と戦おうとしていたぜ。アイツは本当に強い奴だった。最後の最後まで、アイツの眼は輝いていた。でも、たった一人の命を守って死んでいったよ。」

「それって……」

「ああ、守られたのは俺さ。そして守ってくれたのは、日村和馬、お前のじいさんだ。」

そっか……。名前が一緒だったから、なんとなくそんな気がしていた。おじいちゃんの顔は生で見たことないけど、凄く正しい人間だ。つていうのは写真からでもわかった。それは……守るべき物があったから。だから立ち向かえたんだ。

「ところで、なにがあっただんですか？」

「ああ、それか。お前知らないのか？気づかれないように頭の中に記憶を入れたいはずなんだが。」

「あ！あれあなたがやったんですか！」

信じられない！今までの恐怖心はなんだったんだ！

「すまんすまん。こつちも仕事上神山のせいにしておきたかったんだ。まあ仕事つてのはスパイみたいなもんだ。しかし、だ」

「はい？」

「あの記憶はあの時の段階で分かっていたことをまとめただけだ。これから続きを話そう。」

「なんという死亡フラグ……。後ろから撃ち抜かれるんじゃないのか？」

「ん？なんか言ったか？」

「いえ、続けてください」

「そうか。まず一番大切なことだ。単刀直入に言っぞ。神山たちは正義だ。」

「え……。それってどういうこと？」

「たしかにお前は悪くない。でも、世の中には生まれながらの運命つてのも存在するんだ。」

それってどういうことだ？つまり自分が生まれたことで不幸になったやつがいて、そいつらを救うために僕らが狙われているのか？

「そして日村竜馬、標的はお前ただ一人。他はカムフラージュだ。」

そして任務は日村竜馬殺害と存在の抹消。そしてイノセンスの改革だ」

その時、確かに時間が止まったような気がした。

Limit 4 裏切り そして失われた「本当」

日村竜馬が撃たれた我々のへりは、操縦不可能となり中心部の塔にぶつかつた。普通は生きていても大怪我であつたはずだが、奇跡的に僕、神山と一人の部下はほぼ無傷ですんだ。

「クソ、あの日村とかいう小僧マジでなめてんのかチキショウ！」
そう僕の部下が声を荒げてつぶやく。本当に大胆なことをするやつだ。

「まあそう怒るな小室君。とりあえず眠っておけ」
そういつて僕は小室に銃を向ける。

「なあ神山さん、なんで俺に銃をむけるんだよ！わかんねーぞ！」

「だからもう寝て良いよつて言つてんだろ？」

「え、そんな……嘘だろ。」

「バン。……ゆっくりお休み。」

そういつて僕は引き金を引いた。

「……」

「さて、僕一人か。まあいい。もう誰一人いない。ここで全てを終わらせる。日村君も、イノセンスも、そして僕自身も」

すると不意に足音が聞こえた。

「あら、あなた本拠地とかいいながらここには誰一人いないじゃない」
「い」

「天川！貴様まだ僕らにつきまとう気か」

天川だった。やつは学校の教師だが、ただの教師ではない。彼女には本当に「天」という字が似合っている、それほどの女だ。どこにいてもすぐに事が分かつてしまう。

「うるさいわね。少し協力してあげたんだからそれぐらいいいじゃない」
「で、何しに来た」

「色々質問。そのいち、この島の正体。それに、ゲームの本当のシ

ステム。そのさん、オカルト研のメンバーの所在。さあ教えて」
今更情報が洩れたところでなんの意味もなさない。それなら教えて
もいいだろう。

「そのいちの解、この島は情報管理の場だ。これを警察に流出すれ
ばイノセンスは終わる」

「へえ、この後に及んで寝返る気なんだ」

「寝返りじゃない。ただ僕は全てを終わらせるだけだ」

「そう。続けて」

「そののの解、ここには本当に殺傷性のある獣など存在しない。た
だ銃を持たせるための口実だ」

「ふうん。よくわかんないけど、まあいいわ」

「そのさんの解、メンバーはこの島などに来ていない。ちょっとメ
ンバー間の情報伝達をいじっただけでいつも通りの生活をしている。
そしてきつと今頃『日村竜馬が行方不明』という情報が伝わってい
るはずだ」

「そう、彼ははめられたのね」

「おっと一つ忘れていた。金子健太は車にはねられたということだ
入院しているらしいぞ」

「そこまで、ね。今の科学には考えられない洗脳技術があるのね」

「ふん、まあいい。どうせここで日村は生き延びても、のこり一年
で奴が死ぬことは確定している。どうあがいても無駄なことだ」

そう、奴はここを出たとしても確実に死ぬ。それほどまでにイノセ
ンスは強い。

「でもどうしてあなたはわざわざイノセンスを離れてまでこんなこ
とをするのかしら。見当もつかないのだけれど」

「平民には分かるまい」

「何を言っているの？私は神よ？」

「お前の方がわかんねーよ」

そう、駄目なんだ、この世の中を普通と見ては。今この世界には、
絶対にありえないことがありえているのだ。

神の存在。1965年に起きた火災、残った土地。一軒の家と戦争、そして逃亡。さらに十年前のホテル爆発と一人の犠牲者、そして彼がかばった一人の子供。

決して語ることはない、一つの物語がその昔あった。無論、今も語る気はない。でも奴は、日村竜馬は産まれながら罪を背負い生きてきた。本人は自覚していないことだろう。でも彼にもきつと本当のことを知るときが来る。だから。

「僕がここで日村竜馬とイノセンスを抹消する」
本当の世界は、どこへ消えたのだろうか。

Limit 3 偽りを信じて

「そして日村竜馬、標的はお前ただ一人。他はカムフラージュだ。そして任務は日村竜馬殺害と存在の抹消。そしてイノセンスの改革だ」

「……」

「驚くのも無理はない。でもこれが事実だ」

「でもどうして！一体僕が何をしたというんですか！」

「そう、君は何もしていない。でも、さっき言ったように、君には生まれながらの運命があるんだよ」

「運命…？」

「そう、運命。だけどここから先は話せない」

「どうして？」

「ここから先は、君が自分で見つけることであり、本当の終わりで知ってはいけないことだ」

意味が分からない。生まれながら、ってどういうことだよ。本当の終わりってなんだよ。まるで僕の人生は、もう決まっているみたいじゃないか。

それに、巻き込まれたほかのメンバーだって。あいつらも決して何もしていないはずだ。それなのに。それなのに。

「これで俺の話は終わりだ。あとはお前一人で道を開け。いってこい」

「分かりました。僕は決して、運命なんかには負けませんから」

「頑張れよ」

そういつて僕は森へと入っていった。

それにしても、なにもいない。神山は獣がうじゃうじゃみたいな事をいっていったような気がするが、いるのはリスくらいだ。銃を使うまでもない。

本当に静かだ。ここにずっといたい、なにもかも投げ出してしまいたい、という衝動に駆られてしまう。でも僕は失った日々を取り戻すために前へ進まなくてはならないんだ。そして。

「これが塔の入り口か」

一歩一歩階段を上る。少しずつ。少しずつ。

最後の一段を上り終えた。最上階のドアを開ける。

するとそこには。

「遅かったね。日村君」

するとそこには神山が。

神山が。

「おい、神山！」

胸を真っ赤に染めた神山が座っていた。

「おい、神山！お前どうしたんだよ！」

そう、僕の目の前には神山が、胸にナイフが刺さった神山がいた。

「どうもこうもないだろ。ちよつと急所を外して苦しんでるだけだよ」

自殺……？でもなんのために、何が理由で。僕には分からない。

「確かにお前は嫌な奴だったさ。でも、こんなのはあんまりだと思っぞ」

「まあ君に好感を持たれても嬉しくはないさ。そして、これが君へのプレゼントだ」

「どれだよ」

「よくみる、僕の後ろを。ここにはイノセンスのデータベースと色々な記録が保管されている巨大コンピューターがある。そして今、このUSBメモリ十本にデータをまとめた。これでもかなり削ったよ。で、これをケーサツにでも渡せば、それで終了。これでいいだろ」

「仲間はどこだよ」

「まだ僕の話は終わっていない。残ったコンピューターが問題なんだ」
「は？」

「コンピューターってのは、データを完全に消すことはできない。よってイノセンスの残りの奴らがここに来て記録を元に再び動き出すこともありえる。何年後かは分からないがな」

「じゃあどうするんだよ」

「一つは、意味を持たないデータを上書きする。でもこれは、今の僕の技量と技術では不可能な話。その前に倒れてしまう。そこでもう一つの方法だ」

「それって、もしかして、さ」

「多分君の考えている通りだよ」

そう、コンピュータのデータを消すには、データを復旧できないようにする「上書き」とも一つ。データを戻させなくするための……。

「物理破壊、か」

「そう。でも、これだけ大きかったらナイフや銃なんてもんじゃ、コードくらいしか壊せない」

「じゃあどうするんだ」

「ちゃんと爆弾をセットしといたさ」

「よっしゃ！これでOKだな」

「何を言っているんだ。遠隔操作できるボタンはないから、ボタンを押す奴は死ぬぞ」

「おい、それって……」

「もちろん僕は押す気なんてないさ。君一人でやれよ」

それってどういうことだよ。イノセンスを捕まえることはできても、復活をふせがないだなんて。そうしたら、また同じことの繰り返しになる。でもやっぱり、とにかく生き残ることが先決だろう。

「じゃあデータの消去はあきらめる。だからとつと仲間を出せ」

「そういうと思ったよ。だから爆弾起動ボタンと、お前の仲間を閉じ込めた牢屋の開放ボタンを一緒にしてみた」

「っておい。それってどういうことだよ」

「なんだ、説明しないとわからないのか。要するに、森のどこかにお前の仲間を閉じ込めた。そしてその扉の遠隔操作のボタンを爆破ボタンとつなげて、ここに固定した。いわゆる究極の選択だ。お前一人生き延びて再び襲われるのと、お前は死んで、他の仲間はこれから平凡に暮らすのを選んでいいぞと言っているんだが」

「ふざけんなよ！」

そう言っ僕は神山を殴った。そろそろ彼の死期も近いだろうが、そんなことお構いなした。

でも、これからどうしろって言うんだ。僕には選べない。漫画のヒーローみたいに「ここは俺に」みたいなことは言えるわけがない。

仲間は大切だ。でも、俺には絶対に選べない。無理だ……。その時ケータイがなる。僕のケータイは落としたきりだから、神山のか。

「もしもし」

一瞬だった。神山の顔が笑った。

「おい日村」

「なんだ」

「お友達から電話だよ」

「は？」

ほれ、と言つてケータイを投げられた。

「もしもし」

『おい、ゴクエンか！きこえる？』

「金子か。大声で言われなくても分かるよ。あのさ、俺駄目かもしれない」

『なに弱気になってんだよ！らしくないぞ』

「だって俺……。お前達のこと……」

自然に涙がこぼれ落ちる。絶望の時の涙って、こんなに苦しいものなんだ。

『日村聞こえるか』

土門に代わつたみたいだ。

『お前、自分の心配もしろよ』

「え？」

『お前が本当に守らなくちゃいけないのは俺たちなのか？』

「それってどういうことだよ」

『一番大切なのってお前自身だろ？』

「え、でも」

『でもじゃないわよ。アタシ水嶋。別にいいじゃない。アタシ達なんかほつといたつて、だれも責めたりなんかしないよ？』

「だってもう手は届くんだ。届くんだよ」

『でもあなたには日常は戻らない』

「木田か。だけど……、さ」

『だけでもねーよ！お前はお前で生きてゆけ！それが俺達オカルト研の答えだ！』

「それじゃお前らはどうするんだよ！」

『別に閉じ込められているだけだから、すぐに死ぬわけじゃないさ。誰かが来ると信じているさ』

「……」

『いいな、分かったな。それじゃ、また会えることを願っている。来世でも構わないさ。日村竜馬は俺達四人の命を背負って生きていけよ。さもないと怒るからな！』

「……うん、そうだね。分かったよ。俺決めた」

『それでこそ日村だ。じゃあな』

「うん、バイバイ」

そういつてケータイを切った。

「日村君、終わったのかい」

「ああ。」

「その様子、決めたようだね」

「ああ。お前は最後まで、本当に嫌な奴だったよ」

そういつて僕は神山を銃で撃ちぬいた。

「じゃあな、小さな悪魔」

最後にそう言い残し、俺は塔を後にした。

走っても走っても、流れ出る涙は止まらない。本当に、あっけない結末だった。

いつの間にか船についた。

「おっさん！聞こえるかおっさん！」

「言われなくともここにいるぞ。その様子じゃ駄目だったのか。まあ仕方ないことだ。乗れ」

「……うん」

そういつて俺は船に乗り、島を後にした。もう使わないだろう銃は海へと投げ捨てた。すると銃はすぐに海底へと沈んでいった。

船の中で、自分の行いを悔やみながら嘆く、俺の姿に少し似ていた。

僕がまだ幼い頃の話だった。僕が元々住んでいた土地にはきれいな神社があつた。どうやらつい最近（とはいっても10年以上前だが）再築されたらしい。でも、そこにはちよつとした「いわく」があつたのだ。

僕の住んでいた土地にはある宗教があつた。そしてその裏でよく分からない怪しい事をしていた。そんなある日、その宗教の中心である二つの神社が両方とも燃えた。全焼してしまった。この火災は本当に事故だつたらしい。でも、その偶然が運命を呼んだ。

実際再築されたのは一つだけだった。理由は、もう片方の土地をめぐる問題だった。その宗教の中心である一つの夫婦が、自らが神としてこの土地を治める、などと言いはじめたのだ。当然反対運動もあがつた。でも、中心的存在だったからか、肯定するものもいた。結局その夫婦は土地を諦め、都会へと引っ越していった。しかしその土地には二階建ての一軒家が残つたままで、それが取り壊されることはなかった。

その「いわく」を聞き、僕は例の一軒家に侵入した。中はがらんとしていたが、一個だけ、そう一個だけ忘れ物があつたのに気づく。それは。

「 を殺してください」という依頼文と「結果：下の写真の通り完了」という写真付きの任務完了の証拠なるものが束ねられた一冊のファイルだった。

幼い僕には衝撃だった。だって人の死んでる写真だぞ？怖くないわけないだろ？

そしてその事を大人に喋ってしまった。しかし、その人はただの人ではなかった。

中島健三郎。今だから分かるが、この人こそ殺人集団の当時の長、イノセンス初代会長だったのだ。

よく分からないが、僕は気に入られたようだった。秘密を誰にも言わなければイノセンスに入れてやる、と。

正直初めは本当に嫌だった。でも僕のように逃亡を考えている奴がいて、行動に起こしたらすぐに殺されていた。

もう僕にはイノセンスでやっていくしかなかったのだ。

悪者と罵られてもいい。化物と恐れられてもいい。僕は生きたかった。この世の空気を吸っていたかった。

でも、僕は間違っていた。日村君と出会ってそう思った。

怖いけれど強がって、嘘で固めた自分に向かって、彼はこう言ったのだ。

「元凶はお前だろうが！」

多分彼は違う意味で言ったのだろうが、僕にはこう聞こえた。

「誰に命令されたかは知らないが、実際に仲間を傷つけたという行動を起こしたのはお前の意思そのものだろうが！」

だれのものでもない、僕自身の意思でたくさんの人を傷つけてきたんだ。そう思った。そう思えたんだ。

だから。だから。

「だから俺は本当の自分の意思で、全てを終わらせようと思った」

胸部の傷が疼く。ついさつき間違えてナイフを刺してしまったのだ。

ホント、最後まで間違えてるよな、僕。

「じゃあ日村君まで巻き込もうとする理由にならないじゃない？」

「そうだよ。やらないことには理由なんかあるわけじゃないか」

「は？どういうこと？」

「あんたの力を貸してほしい」

「聞いてあげるわ。いって御覧なさい」

巨大コンピュータは本物。爆弾も本物。起爆スイッチも本物。唯
一「仲間」についてが偽物。
最後に彼の究極の決断を迫ってみたかった。彼は何を選択するんだ
ろうか。

そして彼は予想通り出し渋った。

そしてその時ちやうど天川から電話が掛かってきた。

『もしもし、準備完了よ』

そして日村は、壁との会話の末に部屋を出て行った。

「これで良かったの？」

日村が出ていった後にすぐ天川が来た。

「ああ。日村の決断なんて冥土の土産程度さ」

「それって大事じゃないの!？」

「それよりお前、本当になんでも出来るんだな」

「当たり前よ。私をだれだと思っているの？」

僕は立ち上がった。日村はもうこの島など見ていないだろう。

僕はボタンに指を当てる。最後に天川に言った。

「お前を誰だと思っているって？そりゃあ……」

ボタンに少しずつ力を加えていく。あと一瞬もない瞬間。

「陽神だろ？」

爆風のなかで確かに、正解、という天川の声が聞こえた。

本当に狂った世界だった。謎の組織に神様まで出てきて。それでこ

んな結末か。あっけなかった。

でも僕は、日村達と過ごした七月の、最初で最後の平和な日常だけは絶対に忘れなどしない。

あゝあ、いよいよ次回最終回。

愛読者の方々も、ここまでついてきてくださって本当にありがとうございます。ございました。…いるのかな？愛読者。

まあとりあえず、前々から言ってた宣言を。

「続編作ります！」

アクセス数1000以下だったらここで打ち切ろうかなと思ったんですが（天川 声色変化上手設定で）見事に超えてしまったので、続き書きます。

なぜページを変えるのかというと、ジャンルが変わるからです。今度はギャグ中心でいこうかと。もちろん後半からはミステリーにしますが。

とりあえず軽く内容を。

とても危険な夏休みを終えたゴクエン達だったが、二学期に入った途端たくさんのオカルトの魔の手が襲いかかる！ますますカオス化したオカルト小説第二弾、「続・オカルト研対決日記」、近日スタート！

こんな感じ。まあ詳細は最終回のあとがきにでも書くんで。

次回はエピソードです。全てのシナリオを終えたゴクエンの結末です。

では、お楽しみに。

エピローグ 勝者へのファンファーレと「これから」

俺があこの島から自分の家に帰った時にはもう八月三十一日、つまりは夏休みの終わりになっていた。

「ただいま」

「おお、竜馬。随分と帰りが遅かったが、楽しかったか？」
「は？」

「あれ？金子君達と海水浴に行つてたんじゃないのか？」

「……。父さん、俺がいない間になんかあつた？」

「うーん。父さんの昇給くらいだな。ハハハ」

「ふーん。気分悪いからちよつと寝るわ」

「そうか。おやすみ」

そういつて俺は自分の部屋へと入つていった。

どうしてだろう、父さんが海水浴へ行つていたと勘違いしたのは。そういえば、結局イノセンスは壊滅してないんだ。なにか工作したのだろう。ということは金子や土門たちの行方不明も何か違う理由がついて解決されてしまうのかもしれない。

はあ、とため息をつく。涙は船で枯れてしまつくらいに流したので、もう出そうとおもつてもでない。でも、この胸の苦しみはどんなにあがいたところで消えたりはしないんだ。

本当に俺の選択は正しかったのだろうか？もう取り返しのつかない問題に、いつまでも固執してしまっている自分のことを、本当に情けなく思う。でも、この問題は一生をかかつたつて忘れられない、忘れちゃいけない問題なんだ。俺はあいつらの命を背負つてこれからも生きていかなきゃいけない。そう思った時にはもう朝になっていた。

「いつてきます」

「いつてらっしゃい」

そういつて俺は扉を開いた。

「ようゴクエン！一緒に行くぞ！」

いつもだったらそんな風に金子が声をかけてきた。でもあいつは、あいつはもうここにはいないんだ。

そう胸をよぎったその時だった。

「わっ！」

「うわぁー！」

「へへ、驚いてやんの。一緒に行くぞ、ゴクエン！」

「か…金子…だよな？」

「うん、そうだけど？」

「そうなのか！金子なのか！あのバカでうるさくてお調子者で生きる事自体がフザけてる、あの金子なのか？」

「今ものすごく罵倒されたんですけど」

「うおー！会いたかったぜこのボケえええ！」

そう言っただけは金子に抱きついた。

「おい、ちよつと待て！恥ずかしいだろ！やるならひっそりとしたところで…じゃなくて、俺はホモじゃない！離せ！」

そう言っただけは数分間金子に抱きついたままだった。

夏休みがあけて、それでも残暑とやらで、とても暑いこの頃。漫画によくあるUFOや怪獣、化け物なんてものは存在しない平和な時代。そりゃ、どんな時代にもそんなものは存在しないんだけど、居た方が面白いだの、居ない方が平和だの、そんなレベルの低い争いは必ずといっていいほど起こってしまうのが、ニッポンってものだ。でも、いないものはいないんだし、そんな非現実的なものはこれまでも、そしてこれからも現れることはないだろう。

そんなことを考えていたのは、最近謎の宗教団体が突然に壊滅したんだよう、と抜かす間抜け、金子健太に絡まれていたからだ。

「それでさあ、ゴクエンくうくん。謎の宗教団体、突然の壊滅、凄
い不思議だよね？」

「金なら貸さない」

「とりあえず、即答。」

「誰もそんな話はしとらん！で、ゴクエンはどうおもう？」

「うーん、それはなあ」

「呼吸おいて俺は言った。」

「そういうのは、超常現象が絡んでいるに違いない」

その後オカルト研メンバーと再会を果たしてワイワイ叫んだことは
言うまでもない。

それにしても、一体だれが、どのようにしてこんな状況を作ること
ができたのだろう。本当に、超常現象でも起きたのだろうか？でも
俺はそのことをみんなに話す必要はないと思っている。だって、今
が楽しければ、それでいいじゃないか。

某地下研究所での会話

（この人が神山さんね）

「では実験を始める。この実験は『記憶を無くす薬』の人体実験だ」
「ちなみにこの体の主の許可を得たんですか？」

「なにを言っている。こいつは裏切り者かついまままで保護してやっ
た人間だ。許可なんて必要ない」

「そうですか。準備完了です」

「では始めるぞ」

（日村君、あなたの戦いは、もしかするとまだ始まりにすぎなかつ
たのかもしれないわね）

エピローグ 勝者へのファンファーレと「これから」（後書き）

おお、これで形式上の最終回終了か。

今までありがとうございました！

で、次回作つーか続編は「続・オカルト研対決日記」っていうタイトルですので、続き読みたい方は検索してくださいね。まだ作ってないけど。

でも一応あらすじのところはURLのせるつもりなんで、これからもよろしく願います。

で、ちょっとお話について。

最後にあったのは、次回作最終章への伏線です。まあ誰が人体実験を受けているのか、はどっちが受けたのか迷ったでしょ？どっちかは…分かるでしょ？まあそんな感じですよ。

そして「天川＝陽神」。これは一体どういうことなのか。これはさっきの伏線と絡んで最終章となる、最終章ストーリーの中心です。

でも、そういうシリアスなシーンをいれるのは後半からです。前半は楽しくいくつもりなのでよろしくです。

それと、第一話の部分には「筆者とオカルト研メンバーが『オカルト研対決日記』を語る！」というふざけたコーナーも用意してますので、是非読み飛ばしてください（笑）。

では、また今度、といっても一週間後くらいに会いましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6799i/>

オカルト研対決日記

2010年10月14日19時22分発行